目次

第一段　初冠（むかし、男、初冠して）……一
第二段　西の京（むかし、男ありけり）……五
第三段　ひじきも（むかし、男ありけり。懸想じける）……八
第四段　西の対（むかし、東の五条に）……一〇
第五段　関守（むかし、男ありけり。東の五条）……一四
第六段　芥河（むかし、男ありけり。女のえ得まじかりし）……一六
第七段　かへる浪（むかし、男ありけり。京にありわびて）……二〇
第八段　浅間の嶽（むかし、男ありけり。京やすみ憂かりけむ）……二三
第九段　東下り（むかし、男ありけり。その男）……二四
第十段　たのむの雁（むかし、男、武蔵の国まで）……三〇
第十一段　空ゆく月（むかし、男、あづまへ）……三三
第十二段　武蔵野（むかし、男ありけり。人のむすめを）……三三
第十三段　武蔵鐙（むかし、武蔵なる男）……三五
第十四段　あねはの松（むかし、男陸奥の国）……三七
第十五段　しのぶ山（むかし、陸奥の国）……四〇
第十六段　紀の有常（むかし、紀の有常）……四二
第十七段　年にまれなる人（年ごろおとづれざりける人の）……四七
第十八段　なま心ある女（むかし、なま心ある女）……四八
第十九段　天雲のよそ（むかし、男、宮仕へしける女）……五〇
第二十段　楓の紅葉（むかし、男、大和に）……五三
第二十一段　忘れ草（むかし、男女）……五五
第二十二段　千夜を一夜に（むかし、はかなくて絶えに）……五九
第二十三段　筒井筒（むかし、田舎わたらひ）……六一
第二十四段　梓弓（むかし、男、かたゐなかに）……六六
第二十五段　逢はで寝る夜（むかし、男ありけり。あはじとも）……七一
第二十六段　もろこし船（むかし、男、五条わたり）……七三
第二十七段　たらひのかげ（むかし、男、女のもとに）……七四
第二十八段　あふごかたみ（むかし、色好みなりける女）……七六
第二十九段　花の賀（むかし、春宮の）……七七
第三十段　はつかなりける女（むかし、男、はつかなりける女の）……七八
第三十一段　宮のうちにて（むかし、宮のうちにて）……七八
第三十二段　しづのをだまき（むかし、ものいひける女に）……八〇
第三十三段　こもり江（むかし、男、津の国）……八〇
第三十四段　つれなかりける人（むかし、男、つれなかりける）……八二
第三十五段　あわ緒（むかし、心にもあらで）……八三
第三十六段　玉葛（むかし、「忘れぬるなめりと」、問ひ言）……八四
第三十七段　下紐（むかし、男、色好みなりける女に）……八五
第三十八段　恋といふ（むかし、紀の有常がり）……八六
第三十九段　源の至（むかし、西院の帝）……八七
第四十段　すける物思ひ（むかし若き男）……九一
第四十一段　緑衫の袍（むかし、女はらから）……九三
第四十二段　たが通ひ路（むかし、男、色好みとしるしる）……九六
第四十三段　死出の田長（むかし、賀陽の親王）……九七
第四十四段　馬のはなむけ（むかし、県へゆく人に）……一〇〇
第四十五段　行く螢（むかし、男ありけり。人のむすめの）……一〇一
第四十六段　うるはしき友（むかし、男、いとうるはしき）……一〇三
第四十七段　大幣（むかし、男、ねむごろに）……一〇五
第四十八段　くるしきもの（むかし、男ありけり。むまのはなむけ）……一〇七
第四十九段　若草（むかし、男、妹の）……一〇八
第五十段　あだくらべ（むかし、男ありけり。う

らむる人）……一〇九
第五十一段　菊（むかし、男、人の前栽に）……一一三
第五十二段　飾り粽（むかし、男ありけり。人のもとより）……一一三
第五十三段　あひがたき女（むかし、男、あひがたき女）……一一四
第五十四段　つれなかりける女（むかし、男、つれなかりける）……一一五
第五十五段　思ひかけたる女（むかし、男、思ひかけたる女の）……一一六
第五十六段　草の庵（むかし、男、臥して）……一一七
第五十七段　割殻（むかし、男、人しれぬ）……一一七
第五十八段　鬼のすだく（むかし、心つきて）……一一八
第五十九段　東山（むかし、男、京を）……一一一
第六十段　花橘（むかし、男ありけり。宮仕へ）……一一三
第六十一段　染河（むかし、男、筑紫まで）……一一四
第六十二段　いにしへのにほひ（むかし、年ごろおとづれざりける女）……一一五
第六十三段　つくも髪（むかし、世心つける女）……一一七
第六十四段　玉簾（むかし、男、みそかに語らふ）……一一一
第六十五段　在原なりける男（むかし、おほやけ思して）……一一三
第六十六段　難波津（むかし、男、津の国に）……一一九
第六十七段　花の林（むかし、男、逍遙しに）……一二〇
第六十八段　住吉の浜（むかし、男、和泉の国）……一二一
第六十九段　狩の使（むかし、男ありけり。その男、伊勢の国）……一二一
第七十段　あまの釣舟（むかし、男、狩の使）……一二七
第七十一段　神のいがき（むかし、男、伊勢の斎宮に）……一一八
第七十二段　大淀の松（むかし、男、伊勢の国なりける女）……一一〇
第七十三段　月のうちの桂（むかし、そこにはありと聞けど）……一一一
第七十四段　重なる山（むかし、男、女をいたう恨みて）……一一二
第七十五段　海松（むかし、男、伊勢の国に率て）……一一三
第七十六段　小塩の山（むかし、二条の后の）……一一五
第七十七段　春の別れ（むかし、田邑の帝）……一一七
第七十八段　色見えぬ心（むかし、多賀幾子）……一一九

第七十九段　貞数の親王（むかし、氏のなかに）……一六三
第八十段　おとろへる家（むかし、おとろへたる家に）……一六四
第八十一段　塩竈（むかし、左のおほいまうちぎみ）……一六五
第八十二段　渚の院（むかし、惟喬の親王）……一六六
第八十三段　小野（むかし、水無瀬に）……一六四
第八十四段　さらぬ別れ（むかし、男ありけり。身はいやしながら）……一六八
第八十五段　目離れせぬ雪（むかし、男ありけり。わらはより）……一八〇
第八十六段　忘れぬ人（むかし、いと若き男）……一八一
第八十七段　布引の滝（むかし、男、津の国、莵原の郡）……一八三
第八十八段　月をもめでじ（むかし、いと若きにはあらぬ）……一八八
第八十九段　なき名（むかし、いやしからぬ男）……一八九
第九十段　桜花（むかし、つれなき人を）……一八九
第九十一段　春のかぎり（むかし、月日の）……一九一
第九十二段　棚なし小舟（むかし、恋しさに）……一九一
第九十三段　あふなあふな思ひ（むかし、男、身はいやしくて）……一九二
第九十四段　紅葉も花も（むかし、男ありけり。いかがありけむ）……一九四
第九十五段　彦星（むかし、二条の后に仕うまつる）……一九六
第九十六段　天の逆手（むかし、男ありけり。女をとかく）……一九八
第九十七段　四十の賀（むかし、堀河の）……二〇一
第九十八段　梅の造り枝（むかし、おほきおほいまうちぎみ）……二〇二
第九十九段　ひをりの日（むかし、右近の）……二〇四
第百段　忘れ草（むかし、男、後涼殿の）……二〇六
第百一段　あやしき藤の花（むかし、左兵衛）……二〇七
第百二段　世の憂きこと（むかし、男ありけり。歌は）……二一一
第百三段　寝ぬる夜の夢（むかし、男ありけり。いとまめに）……二一三
第百四段　賀茂の祭（むかし、ことなること）……二一三
第百五段　白露（むかし、男、かくては）……二一四

第百六段　龍田河（むかし、男、親王たちの）……二二五
第百七段　身をしる雨（むかし、あてなる男）……二二七
第百八段　浪こす岩（むかし、女、人の心を）……二二〇
第百九段　人こそあだに（むかし、男、友だち）……二二一
第百十段　魂結び（むかし、男、みそかに通ふ）……二二二
第百十一段　下紐のしるし（むかし、男、やむごとなき女の）……二二三
第百十二段　須磨のあま（むかし、男、ねむごろに）……二二五
第百十三段　短き心（むかし、男、やもめにて）……二二六
第百十四段　若からぬ人（むかし、仁和の帝）……二二六
第百十五段　都島辺の別れ（むかし、陸奥の国にて）……二二八
第百十六段　はまびさし（むかし、男、すずろに）……二二九
第百十七段　住吉の岸の姫松（むかし、帝、住吉に）……二二〇
第百十八段　絶えぬ心（むかし、男、久しく）……二二二
第百十九段　形見（むかし、女のあだなる男の）……二二二
第百二十段　筑摩の祭（むかし、男、女のまだ世経ず）……二二四
第百二十一段　梅壺（むかし、男、梅壺より）……二二五
第百二十二段　井手の玉水（むかし、男、ちぎれる）……二二六
第百二十三段　鶉（むかし、男ありけり。深草に）……二二七
第百二十四段　思ふことはいはで（むかし、男、いかなりける）……二二八
第百二十五段　ついにゆく道（むかし、男、わづらひて）……二二九
異一段　雨の音（雨のいみじう）〔阿波文庫本〕……二四二
異二段　清和井の水（むかし、男ありけり）〔塗籠本〕……二四三
異三段　かつ見る人（むかし、男女）〔阿波文庫本〕……二四四
異四段　雲居の峰（むかし、西の）〔泉州本〕……二四四
異五段　中空（むかし、男、ある人）〔泉州本〕……二四六
異六段　時雨（むかしありける）〔泉州本〕……二四七
異七段　春の日（むかし、男、奈良の）〔皇太后宮越後本〕……二四八
異八段　釵子（むかし、男、女の）〔泉州本〕……二四九
異九段　無子（むかし、男、え得まじ）〔阿波文庫本〕……二五〇
異十段　すずろなる道（むかし、男、すずろなる道）〔小式部内侍本〕……二五一
異十一段　すずろなる所（むかし、男、すずろなる所）〔泉州本〕……二五二
異十二段　在原の行平（むかし、在原の）〔小式部内侍本〕……二五三
異十三段　朝影（むかし、男ありけり。わりなき）〔小式部内侍本〕……二五四
異十四段　虫の音（むかし、もの思ふ）〔阿波文庫本〕……二五五
異十五段　憂き目（むかし、色好む）〔阿波文庫本〕……二五六
異十六段　かはたけ（むかし、すき者ども）〔泉州本〕……二五七
異十七段　色革（むかし、男、はるかなる）〔大島氏旧蔵小式部内侍本〕……二五八
異十八段　夢としりせば（むかし、色好み）〔阿波文庫本〕……二五九
異十九段　秋の夜（むかし、男、来て）〔阿波文庫本〕……二六〇

ひとりで川べりの楼閣にのぼると、思いははてしもなく広がる。月の光はあたかも水の如く澄みわたり、この川の水の流れのはては遠く天にまで連る。ともにここで月を眺めた人は、今いったいどこにいるのであろうか。あたりの風景だけは、さながら去年のままのように思えるのではあるが。

趙嘏には愛妻がいたが、節度使に奪われてしまった。趙嘏の嘆きを将軍はあわれに思い、妻を彼に送りとどけた。しかし、二人の逢瀬は短く、やがて妻は死んでしまった。趙嘏はその亡き妻を思い、この詩を作ったのではないかと言われている。してみると、「月やあらぬ……」の歌も、やはり愛する女が今その場にいないことを男が悲しむ、と解釈するのがよいのではなかろうか。つまり、業平が、清和天皇の後宮に入ってしまった高子に対する思いをこめて歌った歌である。なお、この歌は以下の歌集にも見られる。『古今集』巻十五「恋歌五」（七四七）、『古今六帖』第五「むかしをこふ」（三三七五〇）、『在中将集』（三七）、『業平集』（三四）。

第五段　関守

むかし、男ありけり。東(ひんがし)の五条わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所なれば、かどよりもえ入(い)らで、わらはべの踏みあけたるついひぢの崩(くづ)れより通ひけり。人しげくもあらねど、たび重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路(ぢ)に、夜(よ)ごとに人をすゑて守らせければ、いけどもえあはでかへりけり。さてよめる。

人しれぬわが通ひ路の関守(せきもり)はよひよひごとにうちも寝ななむ

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじ許してけり。

二条の后に忍びて参りけるを、世の聞こえありければ、兄たち(せうと)の守らせたまひけるとぞ。

〔通釈〕昔、ある男がいた。東の京（左京）の五条あたりに、たいそうこっそりと通っていた。そこは人目を忍ぶような所なので、男は門からはとても入れなくて、子供が踏みあけた築地の崩れから通っていた。人目は多いわけではないが、男の通うのがたび重なったので、邸の主人が聞き知って、男が利用している築地の崩れの出入口に、毎夜番人を置いて見張らせた。そのため、男は女を訪ねては行くけれども、逢うことができないので帰った。そこで次の歌を詠んだ。

人に知られない私の通う道に関をもうけて見張る関守は、毎夜毎夜寝てしまってほしいことだなあ。

と詠んだので、その歌を知った女はたいそう心を痛めた。そこで、邸の主人は男の通うことを許した。

この話は、男が二条の后（藤原高子）に忍んでお逢いに行ったのを世評がたったので、后の兄たち（藤原国経・基経）が見張をなされたのだということである。

〔語釈〕(一)東の五条わたり―東の京（左京）の五条あたり。「わたり」は、漠然と広い地域を示す。(二)みそかなる所―人目を忍ぶような所。(三)かどよりもえ入らで―門からはとても入れなくて。「え（副詞）……で（打消の接続助詞）」の形で不可能を表す。(四)わらはべ―子供。(五)ついひぢ―築地。土塀のこと。(六)あるじ聞きつけて―邸の主人が聞き知って。「あるじ」とは、五条の后藤原順子のことか。(七)人しれぬの歌―「人知れぬ」は人に知られない